

平安私家集の「折り枝」用例集Ⅰ

岡 おか
田 だ
ひろみ

はじめに

平安時代の貴族たちが手紙のやりとりの際に、その時節にあった植物の「折り枝」をそえた事についてはよく知られている。時には、手紙にそえる事が嗜みであったかのようにいわれる「折り枝」であるが、たとえば物語を紐解いた時、手紙に「折り枝」がつけられたとわかる叙述は、手紙の量と比べればそれほど多くはない。更にいえば、「折り枝」は、手紙に付けられる付属物としてではなく、「折り枝」を贈ることが主で、それにつけられた手紙（和歌）の方が添え物である場合もある。場合によっては、「折り枝」そのもののみが贈られ、手紙や言葉すらない場合もある。

そもそも、「折り枝」とは、どのような場合に、どのような場で、どのような相手とかわされてきたのだろうか。「折り枝」を付ける行為を手紙の作法の一つとしてとらえる考え方は、様々な作品の様々な注釈書の指摘に散見される。現存最古の物語である『竹取物語』の五人の求婚者の一人、石作りの皇子は、難題として課された「仏の御石の鉢」ではなく、「山寺」の「墨つきたる鉢」と和歌をかくや姫に届けるが、それらには「作り花の枝」を付けていた。

……三年ばかり、大和の国十市の郡にある山寺に賓頭びんづる慮の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるを取りて、錦の袋に入れて、作り花の

枝につけて、かぐや姫の家に持て来て見せければ、かぐや姫、あやしがりて見れば鉢の中に文あり。

海山の道に心をつくしはてないしのはちに涙ながれき（二六頁）

この「作り花の枝」の部分に、新編全集の頭注が「当時、人に歌を贈るには、花や木の枝につける風習であった。歌を贈るために作り枝を用い、それに鉢をそえたのである」と記しているのはその一例である。当時の風習と考えられる一方で、「折り枝」とは、人々の機知に訴える非常に高度な言語遊戯の一つだったと思われる例も多数ある。例えば『伊勢集』には「折り枝」のみでコミュニケーションをとっていることがわかる詞書がある。

人のもとに花のいとたかきをやりたれば、しのぶ草をなむをこせたりける

花薄ほに出てすある宿は 昔忍ぶの草をこそみれ（『伊勢集』Ⅱ二四一）

伊勢は「人」に「花のいとたかき」を贈る。伊勢が和歌とともにではなく、「いとたかき」花薄のみに想いを託し、相手へメッセージを伝えようとしている点は重要であろう。「折り枝」が単なる添え物ではなく、「言葉」としてはたらいっていることがわかるからである。相手も「しのぶ草」をもってそれに答えており、ここから「折り枝」が人々の機知に訴える高度な言語表現の一つであることがうかがえるのではないか。あるいは、真剣に想いを伝えたいときに用いられる、和歌と同等の（あるときは和歌以上の）表現媒体ととらえることができるのではないか。既に稿者は、平安中期の「折り枝」表現の重要性に着目し、その表現機能の一端を明らかにした。⁽²⁾ただ、「折り枝」表現は多種多様であり、その全貌を明らかにしたとはいえない。⁽³⁾

そこで本稿では、平安時代の人々の「折り枝」表現の諸相をみるための前提資料として、平安私家集の詞書を中心に用例を確認することにした。今回、私家集に絞ったのは、勅撰集よりも、より当時の現実を写しだしていると考えためである。テキストとしては、『私家集大成』（中古Ⅰ）を使用した。それぞれの家集がいつ成立したか、という問題は残るが、平安初期から中期までの様相は窺えると思われる。中古Ⅰ編所収の、『奈良御集』から『道済集』までの16種（異本含む）の家集から、「折り枝」の用例を収集した。今回は、紙幅の関係上、「をみなへしをいとおほくほりて見する（女郎花を掘って相手に見せる）」（小町Ⅱ五六）や、「花にむすびつけさせ給ける（桜の花の木それ自体に文を結びつける）」（伊勢Ⅱ二五二）のような例は省略している。一方で、「わかな人にたまふ」（仁和御集一）、「柿の下葉に書きてをこせたる」（馬内侍八六）は数え上げている。「折り枝」の線引きは難しく、こぼれおちた用例も多いかもし

れないが、ひとまず花や木や草の「折り枝」（もしくは葉、はなびら）がやりとりされる場を収集することにした。帝と妃の間で、殿上人と女房の間で、恋人間で、友人同士で、隣近所で様々な「折り枝」を贈ったり、贈られたりしている具体的な場をそれぞれの家集より見ることができる。時には「折り枝」は所望され、それを送る際に和歌が詠まれる。家集自体の性質や歌数の違いもあるが、「折り枝」を好んで用いた人々の存在も浮かび上がってくる。細かい検討は、別稿に譲るが、今回示した延べ数四〇〇もの「折り枝」の用例を通覧することで、平安時代の「折り枝」という文化の具体像もみえるはずである⁽¹⁾。

(1) 新編日本古典文学全集（小学館）による。ただ当該場面も風習だから、という理由のみで記されたわけではなからう。石作りの皇子が生花ではなく、「作り花の枝」を付けたのは、彼の身分の高さや財力だけではなく、「仏の御石の鉢」を探しに行かず代替品ですまそうとした彼の性質も表わしているよう。

(2) 拙稿「平安中期の「折り枝」表現」〔表現研究〕103号 二〇一六年四月

(3) 物語や日記における個々の「折り枝」表現については既に研究も多い。(2)の注参照。

(4) 例えば、田中仁氏は「源氏物語の手紙——数と形と——」〔親和女子大学研究論叢〕21号 一九八八年二月)の中で、源氏物語の折り枝の分類も行い、夕顔巻の「白き扇のいたうこがしたる」にのせられた「夕顔」を「折り枝」としてあげながらも、「この夕顔の花は折り枝とすべきか否か疑問」と備考欄に記している。

(5) 本稿のタイトルに「用例集Ⅰ」とあるのは、『私家集大成』（中古Ⅱ）所収について検討した「用例集Ⅱ」も予定しているためである。

《凡例》

一、以下の用例は、『私家集成大成』（中古Ⅰ）所収の歌集を用いて、「折り枝」が記されている詞書を中心に本文を引用している。ただし、読みやすさを優先したため、私に濁点を付した所がある。

一、「折りて」としなくても、文脈により贈ったとわかるものは、用例として数えている。

一、基本的に「折り枝」の例は、同じ場を描いたものであっても、すべて掲出している。

一、同一人物の私家集の場合は、「折り枝」の場面を照応できるよう①②③等の番号で示している。

一、和歌が「折り枝」の素材を示している場合もあるため（例、詞書では「花」としかないが、和歌から「女郎花」であることがわかる等）、和歌も引用している。ただし、同一歌集の異本間で同一の「折り枝」が用いられている場合は和歌を省略した。

一、補入印やミセケチで示されている部分は、これも読みやすさを優先したため本文に反映させた。

一、「折り枝」の部分は□で囲みをいれた。どのように送られたかわかる部分に――を引いている。

一、用例がないものについても、ないことを明示するため歌集名のみ記している。

《用例》

1 奈良御集（書陵部蔵）

筑前のすけ紀のよしのりに、きぬをさくらのえだにつけてたまはするに

世中のひとのえやすきものなれど はなのおりえだおもふこゝろあり（一八）

2 柿本人丸集（書陵部蔵「歌仙集」） 人麿Ⅰ

3 柿本集（書陵部蔵） 人麿Ⅱ

4 柿本人丸集（書陵部蔵） 人麿Ⅱ

5 あか人（西本願寺蔵「三十六人集」） 赤人Ⅰ

6 赤人集（書陵部蔵「三十六人集」） 赤人Ⅱ

7 やかもち（西本願寺蔵「三十六人集」）家持Ⅰ

8 家持集（書陵部蔵「三十六人集」）家持Ⅱ

9 猿丸集（書陵部蔵「三十六人集」）猿丸Ⅰ

① あひしりたりける人の、ものよりきて すげ にふみをさして、これはいかゞみるといひたりけるによめる
しらすげのまの、はぎ原ゆくさくさ きみこそ見えめまの、はぎはら（一）

② あひしりたりける女の家のまへわたるとて、くさ^を むすびていれたりける
いもが、どゆきすぎかねて草むすぶ かぜふきとくなあはん日までに（五）

③ あめのふりける日、やへやまぶき をおりて人のがりやるとてよめる
はるさめに、ほへるいろもあかなくに かさへなつかしやまぶきのはな（三三）

10 猿丸大夫集（書陵部蔵）猿丸Ⅱ

① あひしりて侍人の、物よりきて、すげ にふみをさして、これはいかゞ見るといひたるによみてやる（一）

② あひしりたるおんなのい糸のまへをわたるとて、草 をむすびて^{或本れたりける}いる、（五）

③ 雨のふりけるに、款冬 をおりて人のがりやりける（三四）

11 小野篁集（書陵部蔵）

12 小町集（正保版本「歌仙家集」）小町Ⅰ

・ みもなきなへのほに文をさして、人のもとへやるに

秋風にあふたのみこそかなしけれ 我身むなしく成ぬと思へば（二一）

・ 五月五日、さうぶ にさして人に

あやめ草人にねたゆと思ひしを 我身のうきとおふる也けり（四五）

・ かれたるあさぢ にふみさしたりける、かへりごとに、小町があね
時すぎてかれゆくをの、あさぢには 今は思ひぞたえずもえける（七二）

13 小野小町集（神宮文庫蔵） 小町Ⅱ

14 在中将集（尊経閣文庫蔵） 業平Ⅰ

① 三月つごもり許に、さくらの花を、雨のふる日、人のもとへおりてたてまつるぬれつゝぞしひて折つるさくらばな 春はいくかもあらじとおもへば（五）

② あるみざうしより、わすれぐさをこれはなにとかいふと侍りければ
忘草おふる野辺とは見ゆらめど こはしのぶなりのちもたのまむ（二七）

15 業平集（書陵部蔵「三十六人集」） 業平Ⅱ

① 人のほう事を、つねゆきの大將し給しに、まうでたりしに、ふぢのはなのいとあはれにさきたりしに、あめいといたうふりしに、そのはなをおりて人になてまつる、三月つごもりなり

ぬれつゝぞしゐておりつるとしのうちに はるはいくかもあらじとおもへば（六五）

③ きくのはなをおりて、人のがりやるとて

くれなゐにうつるやいつもしら雪の えだもたはゝにふるかとぞみる（六七）

② うちにさぶらひけるに、宮すどころのざうしより、わすれぐさをゝこせて、これはなにとかいへるといへりければ（九三）

16 在原業平朝臣集（神宮文庫蔵） 業平Ⅲ

① 三月つごもりに、藤の花を人につかはすとて、雨ふる日

ぬれくぞしゐておりつる年の内に 春はいくかもあらじと思へば（五）

17 業平集（正保版本「歌仙家集」） 業平Ⅳ

18 仁和御集（書陵部蔵「奈良御集」）

・まだみこにおましゝけるに、わかなひとにたまふとて

きみがため春のゝに出て若菜つむ わがころもでにゆきはふりつゝ、（二）

19 へむせう僧正（西本願寺本「三十六人集」） 遍昭Ⅰ

20 遍昭集（書陵部蔵「三十六人集」） 遍昭Ⅱ

・なかの院のめぐりにおひたりける せりをつみて、つ糸のさきにつけてたてまつりければ、返に
よもぎふに君いほりしてき、しかば しもかきわけてつめるねせりぞ（四一）

21 棟梁集（伝公任筆切）

22 としゆき（西本願寺蔵「三十六人集」）

23 千里集（書陵部蔵）

24 素性集（冷泉家旧蔵） 素性Ⅰ

① むめ のはなをひとにやるとて

よそにのみあはれとぞみしむめの花 あかぬいろかはをりてなりけり（二）

25 素性集（尊経閣文庫蔵） 素性Ⅱ

① むめ のはな おりて人のがりやるとて（三八）

26 興風集（書陵部蔵） 興風Ⅰ

27 おきかせ（西本願寺蔵「三十六人集」） 興風Ⅱ

28 藤原興風集（部類家集切） 興風Ⅲ

29 躬恒集（書陵部蔵） 躬恒Ⅰ

30 躬恒集（内閣文庫蔵） 躬恒Ⅱ

① となりより とこ夏の花を こひにおこせたりければ、をしみて此歌をよみてつかはしける
塵をだにすへじとぞ思ふ咲しより いもと我ぬるとこ夏の花（一四五）

31 躬恒集（書陵部蔵） 躬恒Ⅲ

① となりより とこなつ こひにをこせて侍けるに（二七二）

32 躬恒集（西本願寺本） 躬恒Ⅳ

②おなじとし十月十九日ふなをかに行幸ありしときに御乳母の命婦まへにめしてもみぢをりてたてまつれとあり、ひとえだをりてこのうたをむすびつけてたてまつる

けふのひのさして、らせばふなをかのもみぢはいとゝあかくぞありける（一九二）

33 躬恒集（正保版本「歌仙家集」）V

②おなじ月の十九日、めのとの命婦もみぢ見にいでたりけるを、かへるとて紅葉ひとえだおりてたてまつる、このうたをそへたり（二九五）

34 とものり（「西本願寺藏」三十六人集）

・藤原た、ゆきかみのしづむよしなげきける、とぶらひにやりけるかへりごとに、きくの花を、りてえだもはもうつろふあきのきくみれば はては影なくなりぬべらなり（六〇）

35 忠岑集（書陵部藏）忠岑Ⅰ

36 た、みね（西本願寺藏「三十六人集」）忠岑Ⅱ

37 忠岑集（書陵部藏「三十六人集」）忠岑Ⅲ

38 忠岑集（書陵部藏）忠岑Ⅳ

39 是則集（書陵部藏「三十六人集」）

40 延喜御集（書陵部藏「代々御集」）

・あさぢおふるのべやかるらん山がつかきほのはなは色もかはらず（四）

と、きこえ給けるを、ち、おとゝめで給て、御てづからおりて、なでしこにつけてぞまいらせ給ける

・このみやすどころまいりて、花のおもしろきを、くらひとたちの許に遣ける

このはなのもみじのなかに我こひは いくらこもれりたれにとはまし（一三三）

41 深養父集（書陵部藏）深養父Ⅰ

42 深養父集（桧色紙）深養父Ⅱ

43 深養父集（部類名家集） 深養父Ⅲ

44 寛平御集（書陵部藏）「奈良御集」

45 三条右大臣集（書陵部藏）

46 中納言兼輔集（書陵部藏）「歌仙集」 兼輔Ⅰ

① はるかむの宰相、左近の中將にて、こうばいを折ておこせたりし
君がため我おるやどの梅花 色にぞいづるふかきこゝろは（六）

② いそぐことありてさいだちてかへるに、かのおとゝのみなせどの、花おもしろければつけてをくる
桜花匂ふをみつゝかへるには しづこゝろなき物にぞ有ける（一二）

③ あだなりといへる人に花おりてやるとて

あすしらぬものにするく桜花 ちらぬかぎりはみまくほしかた（一四）

くちなしの色このみといふはなたてゝ、ゐでの山吹盛すぐすな（二〇）

④ これはゐでといふみかはやことに、山吹の花をもたせていろめける人のおこせたりけるかへりごととなりけり

⑤ おまへにきくたてまつるとて

けふほりて雲ぬにうつすきくのはな 天つ星とやあすよりはみん（五九）

47 兼輔集（書陵部藏） 兼輔Ⅱ

① そのまらうどは右のおとゝなり、玄上の宰相、右近の中將にてこうばいをおりておこせたりける（三八）

⑥ 式部卿宮うせ給ての比、山さとりよりさくらの花をさして、三条おとゝ

さきにほふかぜまつほどの山さくら人のよゝりはひさしかりけり（五〇）

③ あだなりける女に花おりてやりけるあすしらぬものとしるくさくら花 ちらぬかぎりはみまくほしさた本二本ママ（五一）

④ これはゐでといふみかはやうどに、山吹の花もたせて、いろめきたる人にやるなるべし（五三）

⑦ みのむしきたるえだにふみをつけてをこせたるかへりことに

はるさめのふるにぬぎたるみのむしの つけるえだをばたれかおりつる (五五)

48 堤中納言集 (部類名家集本) 兼輔Ⅲ

① はるかの宰相、中将にてみはべりけるさうしより こうばい をおくりてはべりけるかへし (五)

② 三条右大臣のかたの、かりにまかりて、いそぐことありてさきだちてかへるに、かのおとゝの みなせどの、はな おもしろかりければ、それにつけておくる (九)

⑦ みのむし つきたるえだにふみつけておこせたるかへりことに (一〇六)

49 中納言兼輔集 (書陵部蔵) 兼輔Ⅳ

① ^(字分空) 上のさい相、右近中将にて、こうばい をおりておこすとて (七)

⑦ あめのふる日、みのむし つきたえだに、ふみをつけておこせたるひとに (一二)

③ あだなる女に、花 にさしてふみをやるとて (一八)

50 いせ (西本願寺蔵「三十六人集」) 伊勢Ⅰ

① 寛平みかどの御時大宮す所ときこえける御つほねに、やまとおやある人さぶらひけり (中略) をとこのおやのいへは五条わた
りなるにきて かきのもみち にかくかきつけたり

ひとすまずあれたるやどをきてみれば いまぞこのは、錦おりける (二)

涙さへしぐれにそへてふるさとは もみちのいろもこさぞまされる (二)

② とかきて ねずみもち につけてやりける

③ さとにはべりしをり、花のいとおもしろき を式部卿にたてまつるとて

ふるさとのあれてなりたる秋の、に はなみがてらにくる人もがな (一四八)

④ 我いへを人のになしてのち、花 をやるとて

花のいろのむかしながらにみゆめれば 君がやど、もおもほえぬかな (二二六)

⑤ みかど物におはしましけるついでに、かつらなるいへにおはしまして、その花 にかきつけさせたまひける

むめのはななたにのこらずなりにけり　にほひてだにやをしまざりつる（二五〇）

⑥ いとおもしろきさくらを、りて、とものがりやりたりければ、人

桜ばないろはひとしきえだなれど　かたみにみればなくさまぬかな（三〇五）

⑦ 山さくらを人にやりはべりとて

君みよとたづねてをれるやまさくら　ふりにしいろとおもはざらなむ（四五三）

⑧ かにひの花につけて

花のいろのこきをみすとしてきたるを　おろかに人はおもふらんやぞ（四六五）

⑨ わらびをひとにやるとて

わがためになげきこるともしらなくに　なに、わらびをたきてつけまし（四六六）

⑩ 四月にさきたる桜の花につけて、院の殿上人ともの物へおはします御ともにまいりてゐたる所
とまりゐてはるこひしくやおもふらん　花もかくこそおくれたりけれ（四六七）

⑪ 九月八日にとなりより、さくにわたおほみにおこせたりける、あしたにをりてやるとて
かずしらず君がよはひをのばへつ、　なだ、るやどの露とならなむ（四七〇）

51 伊勢集（島田良二藏）伊勢Ⅱ

① いづれの御時にかありけむ、おほ宮す所ときこえける御つぼねに、大和におや有ける人さぶらひけり、（中略）牆の紅葉に歌を
なむかきつけ、る（二）

② とてねずもちのもみちにつけてぞやりける（二）

⑫ なでしこいとをかしきを、となりにやるとて

いづこにも咲はすらめと我宿の　大和なでしこ誰にみせまし（一二二）

③ 花のいとおもしろきを折て式部卿の宮にまいらすとて（一四八）

⑬ 人のもとに花のいとたかきをやりたれば、しのお草をなむをこせたりける

花薄ほに^⑭出いてすある宿は 昔忍ぶの草をこそみれ (二四一)

⑭ ^{いと}おもしろき桜を^⑮おりて、人のがりやりたりければ

桜花色はひとしき枝なれど かたみにみればなぐさまなくに (三〇四)

⑧ ^{かに}ひの花につけて (三五八)

⑨ ^{わらび}を人にやるとて (三五九)

⑩ 四月にさける桜につけて、院の殿上人のものへをはしますにもまいらでとまれるがもとに (三六〇)

⑮ 時雨する日、^⑯かえでを^⑰おりて

ことのはのうつろふだにもある物を いとゞ時雨のふりまさるらん (三六八)

⑪ 九月四日となりより^⑱菊にわたおほひにおこせたりける、あしたにをりてやるとて (四五三)

④ ^{わが}い糸を人の^⑲にして^⑳花をやるとて (四五七)

⑯ ^{もの}へ^㉑かつら^㉒やるとて

けづりこし心もありて珠かつら たむけの神になるがうれしき (四七七)

⑰ ある人のいましたるに、さくらのいとおもしろく咲たるを、またくるまでちらすなといひをきたるに、いかなるにかこねば、

^㉓ちりたる花につけて

待わびてふすまに花は散にけり うき身なりとや枝にとまりし (四八八)

⑦ ^山さくらを^㉔おりて人に (五一三)

52 伊勢集 (正保版本「歌仙家集」) 伊勢Ⅲ

① いづれの御時にかありけむ、大宮す所ときこゆる御つぼねに、やまとにおやある人さぶらひけり、(中略) ^㉕かきの紅葉に^㉖うたを

なむかきたりける (一)

② とて、^㉗ねずもちの紅葉に^㉘さしてなむやりける (二)

⑫ ^㉙撫子のおもしろきを^㉚みて、となり^㉛にやるとて (二二二)

③ 花のいとおもしろきを折て、式部卿のみやにたてまつるとて（二四九）

⑬ 物へ行人にかつらをやるとて（二一九）

⑭ 隣なる人の、そこに見くらべよとて、はなをこせたるに

春にだに忘れにける宿なれば 色くらぶべき花だにもなし（二二五）

⑩ 四月にさける桜の花につけて、ぬんの殿上人のもとへおはします御ともにえまいらで、とまれる人のもとに、（三六一）

⑪ となりなりける人のもとより、九月八日菊にわたかづけてをこせたりける つとめて、とりてやるにつけて（三八三）

⑦ 桜を人にをくり侍とて（四〇一）

⑲ なでしこのさけるを人のもとへやるとて

ひとりのみぬるとこ夏の露けきは 涙にさへや色をそふらん（五二二）

53 むねゆき（西本願寺蔵「三十六人集」 宗于

54 あつた、（西本願寺蔵「三十六人集」 敦忠Ⅰ

① たえたる人のもとに花をつゝみて

こゝろにもあらであひみぬとし月を けふまではなごつみてけるかな（一八）

② いかでとおもひける人のこと人さだまりたるに、をみなへしにつけて

ふたばよりのみしものををみなへし 人のかきねにおひにけるかな（二四）

③ うつろへるきくにさして

われならぬ菊のはなさへ世中を うらむるさまにうつろへるかな（一二六）

④ あるをむなのもとにいきたるに、かいつばたをゝりていだしたれは

ふかきいろかへはたうすくうつろはむ 花にこゝろぞつけざらむもの（一四一）

55 敦忠集（正保版本「歌仙家集」 敦忠Ⅱ

② いかでとおもふ人の、こと人さだまりたる、をみなへしにさして（一七）

56 元良親王集（書陵部藏）

・ こと女にものゝ給とき、て、きちかふにつけて

たのみせばをさなからましことの葉、かはりにけりなきちかふのはな（七六）

・ をなじところにて、つねにみ給女に、しのたけのふし、げきをつゝしみてたまける

しのたけのふしはあまたにみゆれども よ、にうとくもなりまさるかな（九六）

・ 山の井のきみのいへのまへををすとして、かへでののみちのいとこきをいれたまへりければ

おもひいで、とふにはあらじあきはつる いろのかぎりをみするなりけり（一一二）

57 貫之集（正保版本「歌仙家集」 貫之 I

① 藤原のかねすけの中將さいさうになりてよろこびにいたりたるに、はじめてさいたる紅はいをおりて、ことしなんさきはじめ
たるといひいだしたるに

春ことにさきまさるべき花なれば ことしをまたあかずとぞみる（六八七）

② 天慶六年正月、藤大納言の御せうぞくにて魚袋をつくろはせんとてたまはせりける、をそくいでくるにちかひちかくなりししかば、大殿に此のよしをきこしめしてわかむかしよりようすると仰られてあえものにけふばかりつけよとて、つかひしてたまはせたりしかばよろこびかしこまりてようしてまたの日まつの枝につけてたてまつる、そのよろこびのよいしなしいのかんのとの、御かたにわさしかふにきこえんと思ふを、しのびてそのこゝろかきいで、とあるにたてまつる

吹風にこほりとけたる池の魚は 千代まで松の陰にかくれん（七〇〇）

③ むかしはせにまうづとてやどりしたりし人の、ひさしうよらでいきたりければ、たまさかになん人の家はあるといひいだしたりしかば、そこなりしむめの花をおりているとて

人はいさ心もしらずふる郷の ^は花ぞむかしのかに、ほひける（七九〇）

④ おきかぜがもとに かきつばたにつけてやる

君がやどわがやどわけるかきつばた うつはぬ時みむ人もがな（七九七）

⑤あつよしの式部卿のむすめいせのこのはらにあるが、ちかうすむ所ありけるに、おりてかめにさしたる花を、くるとてよめる
ひさしかれあだにちるなと桜花　かめにさせれどうつるひにけり（八五六）

⑥ちかとなりなる所にかた、がへにあるをんなのわたれるとき、であるほとに、ことにふれて見きくにうたよむべき人なりとき、て、
これがよむさまいかで心みんと思ふといはんと心なりければふかくもいはぬに、かれも心みんと思ひけん はぎの葉もみちたる
につけてをこせたり、あはせて十首、をんな

秋萩の下葉につけてめにちかく　よそなる人の心をぞみる（八六〇）

⑦春源といふだいとくの さくらの花をうすかみにつゝみて

空しらぬ雪かと人のいふときく　桜のふるは風にざりける（八八〇）

⑧やまぶきのはなを見よとてたまへるにたてまつる

音にきく井での山吹みつれども　かはづの声はかはらざりけり（八八六）

58 貫之集（天理図書館蔵）貫之Ⅱ

⑦春らんといふ大徳の、さくらのはなをうちかみにつゝみてうたよみてをこせたるかへりごとに（二二八）

②（前略）まつのだにこれか、しこまりかきつけさせにあやしのところにおはしませり（二二九）

⑨なつもみぢしたるきの葉にかきつけて人のもとにたてまつる

夏ながら秋をまちけるもみち葉、　色かはりこそものうかりけれ（三二一）

⑧ある人のもとより見よとて やまぶきのはなをみよとてをこせたるによみてたてまつる（六七）

59 貫之集（伝行成筆自撰本）貫之Ⅲ

③そこなたてるむめのはなを、りてはつせにまうづるたびごとにやどる人のいへにひさしくやどらで、ほどへていたれ、ば、あ
るじ、かくさだかなむやどりはあるといひいだしたれば、（一八）

⑩ ふちばかまをひとのものにつかはすとて

やどりせしひとのかたみかふちばかま　わすられがたきかに、ほひつゝ、（二二六）

⑪あひしれるひとのまうできて、かへれるのちに はな にさしてつかはす

ひとひみしきみもやくるとさくらはな 今日はまだてもちらばちらなむ (三一)

60 源公忠朝臣集 (高橋正治蔵) 公忠 I

61 公忠集 (書陵部蔵) 公忠 II

62 公忠集 (彰考館文庫蔵) 公忠 III

63 公忠集 (部類名家集切) 公忠 IV

64 藤六集 (書陵部蔵) 輔相

65 朱雀院御集 (書陵部蔵「代々御集」)

66 在原元方集 (部類名家集)

67 師輔集 (島原松平文庫蔵)

・れいけいてむの すき にむすびつく

白露のをくよりなびく花薄 ほにで、風になびきぬる哉 (二三)

・ 五葉 につけて、かへし

はるかぜにをしみもあへず散花の 匂ひをいかでまつとゞめぬ (六五)

・ おほすけが後涼殿に侍けるに、ふぢつほより をみなへし をおりてつかはしける

折てみる袖さへぬる、女郎花 露けきものと今やしるらむ (八七)

68 樽垣姫集 (穂久邇文庫蔵)

・ なでしこのいゑにおほくさきたるを、人のこひにをこせたるに、たゞひとえだをやりたれば、いかゞおもひけむ、よのほどに

さながらほらせてとりてけるを、おしあてにさならむとおもふ心にかくいひやる

つゆの身のをきてみつればとこなつの はなはさながらぬすまれにけり (二)

69 増基法師集 (書陵部蔵)

・あるそうのもとより、をみなへしを、こせて

しらつゆのをくにさきけるをみなへし 夜にやいりてきみをみるらん（二一〇）

・菊にむすびつけしふみを、ある人のみたまひて、九日

みつきなくとまれとまでは思はねど 今日はずぐといふはなとこそみれ（二一八）

70 中つかさ（西本願寺蔵「三十六人集」 中務Ⅰ

① むめにつけてひとに

みぬほどにうつろひぬらむ、めのはな ふかゝりきとものちにかたらむ（一四二）

② みのむしのつけるえだにつけて、ひと

うつろはぬはなのあたりをたづねつゝ、いわれるむしをあはれとぞおもふ（一四五）

③ はやすみし いへのさくらを はこにいれて、人

としをへてをりけるひととはなくにはるをすぐさぬはなを見よ君（一五三）

④ さくらのはえだるえだのあかきにつけて

はるすぎてあきはまだこぬほどなれば はなかもみぢかえこそさだめね（一五五）

⑤ 正月まゆみのもみぢにつけて、大納言

しぐれをばまちもつけてや、まのはの おのれまだきにもみぢぞめけむ（一六〇）

⑥ 方違に人の家にいきて返りてつとめて、はぎにあさがほのかゝりてさきたるを、りて、かれより

はつ秋のはぎのあさがほあさほらけ わかれしひとのそでかとぞおもふ（一八四）

⑦ 門さして和泉守順の朝臣のかきをへだて、あるに、梅をこなたの人みなとりたりといふに、きゝてむめをやりたれば、順

あせきにもさはらずむめをゝるときは まへのみせきもさはらざりけり（二〇五）

⑧ あはたの右大殿夜ふかくかへり給て、ほたにひかげをつゝ、みてたまはせたりしにきこえさせし

つゝ、めどもほたにひとめのしげきよに あけばひかげのまばゆからまし（二五三）

71 中務集（書陵部藏「三十六人集」）中務Ⅱ

⑨ みじかき桔梗^{マヤ}をねこめにひきて、女三宮より

つゆしけきあさぢがはらはな、れど みじかきほどにあきをしるかな（一四五）

⑦ むめをやりたれば、順がいひをこせたる（一八四）

⑩ おなじさまなる人に、さくらやるとて

わかるらん人のこゝろはこれをさへ あだなる草のまくらとおもふな（二二二）

⑪ 一条のおとゝたえ給て、花^{マヤ}を、大臣殿、

きみまちしむしかとこそおもほゆれ やどのまへなるむめのにほひに（二二五）

⑫ れいけい殿の宮のきみ、これよりかへりたまへるあしたに、山吹^{マヤ}にさして はふし

いはぬ色をおもひけらしな山ぶきの きみかへりてのけさのつゆけさ（二二七）

⑬ やんごとなき桜^{マヤ}おりて

人しれぬわが身なりせ〇さくら はな身^見にこんといはましものを（二三八）

72 きよた、（西本願寺藏「三十六人集」）清正

・ ふくなりけるころ、とはずとうらみて、山吹^{マヤ}をおこせたる人に

いふかひもなきよの中におひしより くちなしにさくはなさへぞうき（五七）

73 よりもと（西本願寺藏「三十六人集」）頼基

74 たゝ見（西本願寺藏「三十六人集」）忠見Ⅰ

① あるひとのやまぶきたてまつるに

はるとほくありといへとめでやまぶきふきも こゝろのゆけばおりながらみつ（一五八）

② きたのみやよりとて、ふちのはな^{マヤ}たまへるに

いかでかはちらさでくべきふちのはな 風によりてぞなみもたつらめ（一七三）

75 忠見集（書陵部蔵「三十六人集」） 忠見Ⅱ

② きたの宮より、ふぢの花をたまへるを（三〇）

③ ある人、はなひとえだとあるに、そへてつかはす

あまたあらばそふべきものをかみな月 のこれるきくのかぎりなりけり（四六）

④ 内よりめすに、をそくまいれば、これにのりてまいれとて、竹をたまわせたれば

たけ馬はふみかちにしてあしければ いまゆふかけにのりてまいらむ（六〇）

⑤ ある人の、まゆみのもみちをこせたるに

ねながらもひくやべきものをしらまゆみ をきたるまゆみたれかおりけむ（七三）

⑥ といひければ、うちかけてのちになまみるを、みなへしにつけていひをこせたる

みるめかりあまに、たれとをみなへし けふはわれにぞかつきをとれる（一〇二）

76 安法々師集（書陵部蔵） 安法

77 山田集（書陵部蔵）

・ ひとえだおりてと、人の、たまはせしかば

いづれともわきておるべき枝ぞなき ありとしあるは花の木なれば（二）

78 信明集（正保版本「歌仙家集」） 信明Ⅰ

79 のふあきら（西本願寺蔵「三十六人集」） 信明Ⅱ

80 信明朝臣集（書陵部蔵「三十六人集」） 信明Ⅲ

81 もとさね（西本願寺蔵「三十六人集」） 元真

・ 小野宮御忌にさき／＼かたらふごたちに、をみなへしにつけて

うつろはぬほどだにも見むをみなへし こゝろのとがにつゆはおかなむ（四九）

・ 八月十五夜蔵人所にて、つきのこゝろをあはれがりて、たちいで、ゆくに、れいけい殿御障子ごたち 花すゝきを折て、たてじ

とみよりさしいでたり

・しらつゆのおくよりまねく花す、き　むすばぬさきにまづぞみだる、(一二八)

女へしのはなをもてきてひとのうふるに

むしのねのぼるにもたえぬをみなへし　いとゞものおもふやどにうゑつる(一三五)

・ものいふ人に、ことひとかよふとき、ていきたるに、
をみなへしを折ていだしたるに

をみなへしなべてくさ葉におくつゆの　あきはてがたに見るこゝろか(一三八)

・はぎの花人にやるとて

さを鹿のねに鳴そむる秋はぎを　折てぞ見ゆる人のこゝろは(一四二)

・あるひとのもとにゆきたるに、
はぎを折てさしいだしたり

秋はぎのいろづくまゝに鳴鹿の　声をばよそのことゝき、けり(一四二)

・むさしのかみひでしげ、つるのかたの　とうかい桜あぜち殿にたてまつれり、その使にしろかねのはこにくすりいれたり、それ
に

ことしよりきみに千歳をゆ鶴にぞ　とうかいたうにもとめいでたる(一五五)

82朝忠集(小堀本) 朝忠Ⅰ

・本院のゆげひに、
かうじのかはにかきて

うすけれどうすくもあらず山吹の　やへのいろにし思ひそむれば(二五)

・す尺院のみかど、院にいでさせたまで、御ぶつ命のあしたに、
けづり花にさして、御あそびのをりに

としごとにさくらはみれどいかなれば　けふをるそでのつゆもかはらぬ(六三)

83あさた、(西本願寺蔵「三十六人集」) 朝忠Ⅱ

84村上御集(書陵部蔵「代々御集」)

・しげあきらのみこの女御の、まだまいらざりけるに、
さくらにつけて

ふく風のをとにき、つつさくらはな　めにはみえてもちらす春かな（六）

・ 六月のつごもりに給へりける御返しを、桔梗につけて、秋ちかう野は成にけり、人の心も、ときこえ給へりければ
秋ちかうなるもしられず夏の、に　しげる草葉とふかき思は（一六）

・ 又ねのひに、松にさして有ける、内の御

ねのひにはいかにせよとかうち^{たへ}はへて　松をもしらぬこゝろなるらん（二九）

・ はるに成てまいり給はむと申けるが、さもあらざりければ、まだとしもかへらぬにやあらむ、との給はせたりける御返しを、

かつらの紅葉につけて

かすむらん心もしらずしぐれつ、　すぎにし秋のもみちをぞ見る（五八）

・ いづれのか、女御の御かたに花のありけるを御らんぜむとありければ、梅の枝をおりて
見つゝのみなぐさむはなのえだならば　かけて心ぞおもひやらまし（八四）

・ 中宮にわたらせ給て、藤にさしてたてまつらせ給ける

かへるをばうらみやすらむ藤のはな　こゝろあはむとちぎりつれども（八六）

・ さとより、忘草を御ふみの中に入て、たてまつり給へりければ

すみの江の物とき、しをわすれ草　うたがひもなきわれにおふらん（八八）

・ 同九年正月四日、故太后の御ために、弘徽殿にて御八講おこなはせ給けるに、わかなの籠につけさせ給へる
いつしかに君におもひしわかれをば　法のためにぞけふはつみける（一一〇）

・ 夏、は、その紅葉の散のこりたりけるにつけて、女御のみこのもとに

時ならでは、その紅葉ちりにけり　いかに木のもとさびしかるらん（一二八）

85 清信公集（書陵部蔵）　実頼

・ 八月許にし^のびたひ人にあひて、人めをいたく忍しかば、よふかく帰るあしたに、すゝきにつけて
花すゝきむすびをきたる袂ゆへ　露も心もとけずみえける（一二〇）

・は、上、東宮にさぶらひ給しに、いとまにてひさしくまいり侍らざりしかば、なでしこに付てたまはせたりし
よそへつゝ、みれとつゆだになくさまず いかゞはすべきなでしこの花（一二六）

・御返、そのはなのすこしなびたるに

しはしたにかげにかくれぬほどは猶 うなだれぬべしなでしこの花（一二七）

・堀川中宮にて、雪のいみじうたかく降たるつとめて、れいけい殿のほそ殿に ゆきふりかゝりたる薄
もりつかさして入て、少将のたてまつりたるとぞある にさして、すだれより殿

時過てかゝるすゝきの身なれども まねく方にぞ雪とまりける（一二〇）

・一品宮のだいはむところにて、かうじ ねがひしかば、
或やまふきの花にかうじをおりておかくして出したりしかばとりて 一糸ふくろにてさしいでたり、こしにつけて むめつほのかたにまいりて、

花をこき入て、 かくかきていれたり

うれしやはこれをみつればあぢきなく 花になりたる心ちこそすれ（一二四）

・ふぢのじゅう、五月に まろなるさうぶ につけて

こまたにもすさめずときくあやめ草 かゝるは君がふさひとかきく（一二八）

86 海人手古良集（書陵部蔵） 師氏

87 一条摂政御集（益田家旧蔵） 伊尹

・このしさう、おなじ女の本に まど かりて、 まだよぶかきにいで、 まだしかりけりとて、 かへりいりて、 あけてまかりかへりて、

うつろひたるきくにつけて

つねよりもいろこくみゆるはなのいろは おきかへりつるつゆやしるらん（一六）

・さとにいでたるに、りむじのまつりの かざしのはな にさして

きみゝよとさしゝかざしはちりもせず うつろひもせずのどけからなん（八六）

・ しのぶくさのもみぢしたるをふえに いれたまへる

こひしきを人はいはでしのぶくさ しのぶにあまるいろを見よかし（一二二）

・ち、おとゞうせ給てのころ、はぎにさして

うちみればいとゞものこそかなしけれ　うへはうれなきはぎのしたはに（一四四）

・いとほどへて、しのぶくさのかれたるにさして、おとゞ

ふゆさむみねさへかれにしゝのぶくさ　もゆるはるへは我のみそしる（一四七）

・まちしりの宮にて、もみちにさして

心みにをりてみつれどこがらしの　もりのもみちもいろづきにけり（一八七）

・かよひたまてのちに、さくらのちりたるをふみにさして

てもたゆくむすぶやなにぞさくらはな　むかしわすれぬ人やみるとて（一八九）

88 本院侍従集（書陵部蔵）

89 藤原義孝集（九州大学蔵）

・ほりかはの中宮にて、ゆきのふりたるつとめて、れいけい殿のほそどの、
かれたるすゝきに、ゆきふりかゝりたるを、とのも

つかさしてさしいれて、弁の少将のきみたてまつれたまふとて、それにむすびつく

まねくかたにぞゆきとまりける（二九）

とかきておこせたりければ

ときすぎてかゝるすゝきのみなれども（二九）

・また まろなるさうぶにつけてイ

春ははなちゝやちぐさにをもへとも　ことのはしげしかくてやみなん（三七）

・藤の侍従、五月五日、まろなるしやうぶやるとて

たまだにもすすめずといふあやめ草　かゝるはきみがささひとぞきく（三八）

あきのはじめに をみなへしにつけて女に

・また、女をたつねしに

つゆふかきものにそありけるおみなへし たづぬる人をたゞにあらせよ (五九)

・ 八月ばかり、しのびたる人にあひて、夜ふかくかへるあしたにすゝきにつけて
はなすゝきむすびおきつるたもとゆへ つゆもこゝろのとけずみえつる (六九)

・ はゝうへ東宮にさぶらひ給しに、いとまにてひさしうまいり侍らざりしかば、
よそへつゝみれどつゆだになぐさまず いかゞはすべきなでしこのはな (七三)

90 仲文集 (書陵部蔵)

・ はなのえだに、ふみのあるをみて

はるのとは心つかひをたづぬれは はなのたよりにこてふなりけり (八)

・ 三条の大臣殿にて、ゑちごに物いひて、あくるまであるに、
なでしこのつゆなどをきたるあふぎを、これみたまへとてさしい
でたれば

おもひしる人にみせばやもすがら わがとこなつにおきあたるつゆ (一六)

91 小馬命婦集 (書陵部蔵)

・ もちふむとしごろいひわたるに、つれなければ、
ふぢにさして

ひさしきをまつとやふちも思らむ かゝるをなげくやどにしもさく (一一)

・ また、きなるうすやうを、
はぎのしたはにえりて、白銀を露にをかせて
をじかたつをのへにしける秋萩に したはのうへをしる人のなき (二二)

・ はぎのしたはのこきをとりて

つゆかゝるはぎをおきてさをしかの まつわびしらになくをこそまで (二二)

・ これより、まゆみのもみちにつけて、

あさなぐきりへだつめるさを山の にしにさすえはつゆやおくらん (二三)

・ しもつきつもこりかたに、
むめのはなにつけて、おとこ

ふゆやはるはなやはるべのむめならぬ ゆきにかよひし色はそれにて (二八)

92 西宮左大臣集 (書陵部藏) 高明

93 為信集 (書陵部藏)

・ わすれしとちぎりわたりける女のもとに、藤の花につけて

あきになればたつなりにけりいかにぞや ちぎりしふちのうらはなれども (三)

・ はつゆきのふる日、とこなつにさして

おもひやれつまなきやどのとこなつに はらひもあへずけさはつゆき (九)

・ おぎのはを、むしのむすびたるやうにしたるを、あるおとこ、をかしき物哉とてとらすれば、なにかをかしきとてすつれば、
かくいふ

むしだにもゆへこそ見ゆれなどかきみ おぎのはをだにむすばざるべき (三〇)

・ 又、とこなつにさして

もろともにおきふすつゆの身なりせば うれしからましとこなつのはな (三六)

・ 五月五日、つれなき人のがり、さうぶのねやるとて

あやめぐさけふしもかゝるたもとな いつかはきみがつらきおりなき (三七)

・ 五月五日、ある人のつまにしのびて、いで、物いひて、あやめぐさに書て、

わがやどのつまのみあらずあやめ草 ねもあらはれてうれしからまし (四九)

・ ほうもち、人のこひたるやるとて、はぎのえだにつけて

うやまひてふしをがみつ、ひとえだを みよのほとけにたてまつるあき (五〇)

・ 七月七日のつとめて、あさがほにさして

あさがほのつゆうちはらひたなばたの けふのくれをばまちやわたらん (五九)

・ 同日、かちのはにかきて、たてまつりし中に

けさはとてふなでをすらんひこぼしの かぢのはをこそわれかはしつれ (六〇)

・ 色このみたる女に、子日の松のねおほかるにさして

ひくことやけふはあまたになりぬらん きみをねのひに見ゆるまつかな (六九)

・ いみじうぬれぎぬきる女に、はぎのわかばにさして

みやぎの、はぎのわかばすゑよはみ くるしげなりやことのほのつゆ (八九)

・ 物いふ人くとねにけりとき、て、とこなつにさして

しらつゆのをけるものなるとこなつを ひとふし人のおりてけるかな (一一二)

・ 斎院にて、けふあひたりし人の、あふひを、こせたれば

たなばたのこ、ちこそすれたまさかに としにひとたびかざすとおもへば (一三四)

・ 九月九日、わたかづけたる菊にかきて、女に

おいもせずしなずときくもなにかせん あふくすりとぞおもはましかば (一四六)

94 順集 (書陵部蔵「三十六人集」) 順 I

95 源順集 (書陵部蔵「歌仙集」) 順 II

・ 五日、菖蒲につけて、あるところにてまつらせける

進上 こゝろざし

深 ふかき

右葉之菖蒲草 みきはのあやめくさ

千年五月五日可莉 ちとせのさつきいつかゝるべき (一一)

・ 中のみかどの家の南に中務すむ、六月また梅の枝につきたるをおりて、北の家にくれることばにいはく、こゝのはまだかく
なんのこりたると、すなはちこゝには

るせきにはさはらず水のものにあへば まへの梅津ものこらざりけり (二五〇)

96 斎宮女御集（書陵部藏） 斎宮女御Ⅰ

- ① あひしれりける人のものよりきて、すげにふみをさして、これはいかゞみるといへりけるによめる（三）
② はるになりてまいらむときこえ給けれど、さもあらざりければ、まだしも返らぬにやとの給はせたりける御返を、かえでのみちにつけて

かすむらんほどをもしらずしぐれつ、 すぎにし秋のみちをぞみる（四九）

- ③ 野、宮におはしける比、三条の宮に、まゆみの紅葉のひとはありけるにさして
こがらしのかぜのつかひはちかけれど 人はわする、もりにぞ有ける（一〇五）

- ④ むまの内侍、山ぶきにさして

やへながらあだにみゆれば山ぶきの したにこそなきゐでのかはづは（一二二）

- ⑤ 女御どの、御かたに花のありけるを、御らむぜむとおほせられければ、むめの枝を、りて
みつゝのみなぐさむはなの枝なれば つけてこゝろや思やらまし（一五〇）

97 さいくうの女御（西本願寺藏「三十六人集」） 斎宮女御Ⅱ

- ④ むまの内侍、やまぶきにさして（六三）

- ⑥ 又、子日の松にさしてありし（九二）

- ② 春になりてまいらんとときこえ給れば、まだとしもかはらぬにやとの給はせたりければおほんかへりに、かへでのはにつけて（一七）

- ⑤ 女御殿、御かたに花のありけるを、御覽ぜさせんとありければ、むめのかたを、りて、御（一三八）

- ⑦ む月のはつ子の日、雪のいたくふりたるに、みくしげ殿、女御、松につけてこの女御に

君がためこゝろをやりてひくまつは ゆきもかはかぬものにぞありける（二一一）

- ③ 十一月許もみぢのたゞ一葉のこりたる、みくしげ殿、君ちかくおはしておとづれたまはぬに、たてまつり給（二一六）

- ⑧ しも月にさきたるむめを人のたてまつれりければ

ふゆごもりゆきちるさとおもなれて ほころぶ花もしらずぞありける (二四八)

⑨ やよひばかりに、あめふる日、かつらのもみぢ人のもてまいれり

春さめとみるはしぐれかおぼつかな かすみをわけてちれるもみぢは (二五〇)

98 斎宮集 (正保版本「歌仙家集」) 斎宮女御Ⅲ

③ 野、宮におはしける比、三条殿より、まゆみのもみぢのひとはあるにさして (四九)

④ むまのないし、山ぶきにさして (五四)

⑤ 女御々かたにはなのありけるを、御覽せんとありければ、梅ひとえだおりて、上 (九八)

99 斎宮女御集 (小島切) 斎宮女御Ⅳ

③ の、宮におはしけるころ、三条の宮まゆみのひとはあるにさして (二八)

④ むまのないし山吹にさして (二三)

⑩ 十一月にさきたるさくらを、ひとのまいらせたれば

冬こもりゆきちもさらにおもなれてほころぶ花もしらずぞありける (九〇) ※斎宮女御Ⅲ⑧は同歌だが、「梅」

⑪ 三月許あめふる日、かへでのもみぢを人のまいらせたれば

ちる花をとづるかすみも春ながら にしの山へはもみぢすらしも (九二)

100 源賢法眼集 (書陵部蔵)

101 御形宣旨集 (書陵部蔵)

102 兼澄集 (書陵部蔵) 兼澄Ⅰ

① たちはきにてはべりしとき、宮の女房のまへをわたり侍りしに、むめのはなをさしいで、はべりしかば

たまたれ ○ こすのうちにはむめのはな おもひかけたるひとやおる覧 (二)

② かよひはべりし女を、わすれがたになり侍りしに、ちぬさき木のとははみて、すゑはかれてはべりしに、ふみをつけて、か

くいひて侍りし

わびつ、もすゑの世をだにたのむ木の　うれしもまつぞかれまさりける（一八）

③よのなかいとさわがしきころ、人のもとより、そのまへのさくらちりやしにたる、ひと枝をこせよといひたる、やるとて
よのなかにをりくらぶればさくらはな　にほひのどけきこゝちこそすれ（三四）

④さいす、けちか露草こふやるとて

てにつみて身づからそめしはな、れば　としはふれどもいろもかはらず（四二）

⑤ひとのむすめをけそうしはべりしに、おやにのみいひわたりて、七月ばかりに、すゝきにさして、女に
あきかぜのふくにつけつ、はなす、き　ほのめかすをばしるやしらずや（九九）

103 源兼澄集（島原松平文庫蔵）兼澄Ⅱ

⑤ある人のむすめのもとに、せうそこいへと、おやのみかへりことをいひしかば、七月ばかり、すゝきにつけて（六）

⑥三月つごもりに、まへにありしさくらのおもしろかりしに、とう宮に侍る女房の、いでたりしか、まいりたりしに、つけてい
ひし

はなさかりすぎゆくやどにさくらありと　にははせはるの宮のわたりへ（三一）

②ちいさき木のもとすゑのかれたりしにつけて、をんな（四三）

①女房のむめのはなをおりて、なげいだされたりしかばたちわきなりし時、宮のいぬかりせさせたまひしに、大はむ所のまへを
わたり侍りしに、（五二）

④すけちか、つゆくさの花こひて侍、かへしつかはすとて（七七）

⑦わすれ侍しをんな、四月まつりのひ、くるまより、あふひをおこせて侍しかば
神かえて君がちかひしわがなかの　あふひはよそにならんとや見し（一三六）

104 恵慶集（書陵部蔵）

・あるやんごとなきところより、きくのうつろひたるを、いだしたまへるに
さまことに、ほふをみればきくのはな　たちとのまがきおもひこそやれ（二一九）

105 曾祢好忠集（天理図書館蔵）好忠Ⅰ

106 好忠集（伝西行筆 卷子本切）好忠Ⅱ

107 好忠集（伝西行筆 榊形本切）好忠Ⅲ

108 千穎集（穂久邇文庫）

109 惟成弁集（書陵部蔵）惟成Ⅰ

① いへのひむがしにすむ人に、おもしろきやまぶきを、りてやりたれば、ものもいはねば
なになれやいふにまされる花のいろも るでのさと人心くまねば（五）

② 五月になりて、きなるうすやうに、たち花をつゝみておこせたり、ものもいはねば、はにかきてやる
くまざりしるでのさとなるはな、れど（六）

といひたれば

たれゆへおれるそでのしるべぞ（六）

110 惟成集（伝坊門局筆切）惟成Ⅱ

② 正月五日になりて、きなるうすやうに たちばなをつゝみて、はにかきてやる（二）

111 元輔集（書陵部蔵）元輔Ⅰ

① なしつばにて、かうのないしのすみはべるさうしのへだてのかみより、ゑぶくろにものいれて、ふぢのはな さして、ゆひてさ
しこしてはべしに

たちかへりみれどもあかずはるかぜの なごりにおれるふぢなみのはな（二）

② 女はうのくるまに、梅のはなを、りてつかはすとて

まつをのみひきてかへらむ、めのはな おもふこゝろのこるらんかも（三九）

③ むらかみの御とき、五月四日かうしに、おとこかた女かたとうたをあはせ、女は かちにければ、八月廿日まけわ、いとをむすび
たるこに、松むしすゝむしいれて、おみなへしにつけてはべりしに

女へしそらにかゝりてはふくずの まくとやおもふ露のとかぬを（七二）

① なし これはさきにかきたりいかなることにか つばに て、 かのないしのすみはへる けいたがきのかみより、 糸ぶくろに物いれて **ふちのはな** してなげこしてはべりしに（九四）

④ のぞみならぬを、 中ふんがもとより、 **花につけて**

はるをへてはなまちとほにみゆるかな 秋のたのみもなくはこそあらめ（一五四）

⑤ 二月つごもりに、 ひむがしの院にまかりて、 **さくらの花すこしつぼめる**をみて、 二日ばかりありて、 その院なる人のもとにつかはす

さきぬらむとおもひやりてぞおしまるゝ 心もとなくみえしきくらを（一七八）

112 元輔集（正保版本「歌仙家集」）元輔Ⅱ

① なしつばにてないしのすみけるつばねの、 ざうしのへだてのかみより糸ぶくろに物いれて **ふちの花** してゆひて、やまにちらして侍しに（二）

② 女車に **桜の花** おりにつかはすとて（三三）

⑥ 菊の花 いとおもしろくさきたるにつけて、ときふがよみて侍り

さくの花さかりの色のわがみには しろくなるなどわびしかるらん（一〇三）

④ なかふがもとよりのぞみのえならぬを、 **花につけて**とぶらひて侍しかは（一二二）

113 元輔集（尊経閣文庫蔵）元輔Ⅲ

114 兼盛集（書陵部蔵）兼盛Ⅰ

115 かねもり（西本願寺蔵「三十六人集」）兼盛Ⅱ

・ むま中将さとより、 **す、きなどすへてあきのはな** を、りませて

きみによりはつねをつめるはなす、き つゆかけまくはかしこけれとも（一〇五）

116 円融院御集（書陵部蔵「代々御集」）

・つば前裁に、花なしとき、給て、一もと菊のおもしろきをまいらせ給て ないしのかみ
しぐれつ、時ふりにたる花なれと 雲井にうつる色はかはらず（一四）

・一品宮に わかな まいらせ給て、銀のひげこに入れて 東三条のおとゞ
わかなつむ腰はふたへに有ながら のべの小松をたのみてぞひく（四二）

117 よしのふ（西本願寺蔵「三十六人集」 能宣一

① おもふことはべるをとひ侍らぬをんなに、おなじ日 あやめのねにつけて
あはれともとはぬにしけるあやめ草 つゆけきねのみかゝるそでかな（一四）

② 中納言朝成朝臣藏人頭にはへりし時、ある人を （二文字） こぜんとて、そのこといはずによびはべるにまかりたれば、ものなどのたう
ひ侍りて、女方にゆづりつけはべりて、いりての、ちものいはせ侍て、すのうちよりかはらけに ひかげをいれて、さしいだせ
り

ありあけのこ、ちこそすれさかつきに ひかげもそひていでぬとおもへば（六三）

③ なしつばに和歌えらぶとて、これかれはべるに、かたはらなる内侍のつばねより、藤花をものよりうちこしてはべりしかば、
なをあらじとて

うしろめたすゑのまつ山いかならん まがきのしまをこゆるふちなみ（一六四）

④ ふみなどつかはす人のつれなく侍に、つのぐみたるあしにつけて

なほやまたむすばをるらんあしもゆる ぬまのこほりのとくるはるさへ（一九九）

⑤ 五月五日 さうぶのねにつけて人につかはす

こもりえのみぎはのしたに今日まつと ねざしつもれるあやめぐさかな（二一四）

⑥ 人のもとにまかりてものなどいひて、をみなへしを、りてすだれのうちにさしいるとて
をみなへしにほふあたりの、をしめて あきのよなくたびねをぞする（二三七）

⑦ 九月許、人のもとに、もみぢのえたをりてといひつかはしたる返事に、かくましたり

こがらしの風もふかぬにいろ／＼の もみぢのえだを、らするやたれ（三四八）

⑧ 女の許に、紅梅さしてつかはし、

なげきつゝ、なみだにそむる花のいろの おもふほどよりうすもあるかな（三五六）

⑨ みのむしのすくみたる、まゆみのいとあをきにさして

はなちりてあめのもりぬるなげきには 身のさだめたるむしぞすみける（三六二）

118 能宣集（正保版本「歌仙家集」） 能宣Ⅱ

119 能宣集（書陵部蔵「三十六人集」） 能宣Ⅲ

③ なしつほにて、おほやけことつかまつるとて、あるないしのつほねより、ふぢのはなにものをむすびつけて、きりかけのはさ
まよりさしこしたるに（九一）

② しさう糸に、をみたまはれる人のいへのうちより、さけいしはべるとて、かはらけにひかげをいれて、いだしてはべるを、と
りはべるとて（二七八）

⑨ みのむしのすくひたるまゆの、いとあをきにさして（三四四）

⑩ こうばいにさして、そのいろのしきしにかきて

なげきけるなみだにそむるむめのはな おもふほどよりうすくあるかな（三五五）

120 輔尹集（彰考館文庫蔵）

・ 人ぐくさははせ、しに、おし草につけて

おしくさのくさのかきおにことやめて まけにけりとはいはせずもがな（七）

121 加茂保憲女集（書陵部蔵「六女歌集」） 保憲女Ⅰ

・ ……まくらがみに おもしろきもみぢを、ひとのをいたりければ、おもひあまりて
くもりつゝ、涙しぐるゝわがめにも 猶もみぢば、あかく見えけり（二）

122 賀茂女集（書陵部蔵） 保憲女Ⅱ

123 たかみつ（西本願寺蔵「三十六人集」）

・ ひえのやまにはべるころ、人のたきものをこひてはべりけるまゝに、
すこしむめの花えだにわづかにちりのこりてはべりける
につけて、つかはすとて

春たちてちりはてにけるむめの花 たゞかばかりぞえだにのこれる（四三）

124 道信集（島原松平文庫蔵）道信Ⅰ

125 道信朝臣集（書陵部蔵）道信Ⅱ

126 時明集（書陵部蔵）

127 馬内侍集（三手文庫蔵）

・ かかるべきことにあらずといひてあはぬ人のもとより、なが月ばかりに、
まだらなる草葉を、こせければ
人こゝろまだらにみゆる草なれば かれぬる人のしるしなるべし（三五）

・ かくてその冬うちとけてもあはざりければ、年かへりて二月ついたちころに、
つばみたる花にさして

あだにはとたのみし風しあらからば さかりもなくて花や散なん（三六）

・ かくてあるに、さはれなどいふころ、
くれなゐの花をおとこのみせにをこせたれば
くるゝとて色にいづればあさえけり そめてくやしき花をみるかな（四〇）

・ ほかにとてかへしつ、などをとはのといひたりしかば、身づからきたるにあはねば、九月九日菊にさして
菊のうへの露をばをきてなみだこそ わたの衣の袖もかはかね（五一）

・ またあるおとこ、
しのぶくさにつけて

しのお草忍ぶやつまといひながら 夜ふかく露のおくる袖かな（六四）

・ 大風のふきたるつとめて、
ひはだにさして、あるおとこのもとに

けさみればとまれる宿もなかりけり しのぶの草もいかゞなりにし（六七）

・ ひさしくあはで、
なでしこにさして

逢ことはかなでしこのはるけくて 思ひわづらふとこ夏の花（七〇）

・ 人のもとに、かれたるもみぢの枝をやりたれば

しもかれのあふくなげきの枝なれば ふかき色とはみえずぞ有ける（七九）

・ かへし、かしは木のわかき葉にさして

ほとゝぎすしのぶるものをかしはぎの もりても声のきこえけるかな（八三）

・ めある人のもとに物いふにつゝめば、かきのした葉にかきてをこせたる

露とけておもひもをかし物ゆへに したにこがれて何かしのぶる（八六）

・ きんたうのきみ、こぞのはるやりたりしむめの花を、ふみにさしてをこせたれば

むかしににたる梅のはなかな（一〇五）

・ をとりたるおとこ、やなぎにふみをさしてをこせたれば

ふく風になびくとやきく青柳の いとあさましくおもひよるかな（一一九）

・ 忍びたる人、かはたけをうへよとてをこせたれば

風ふけばこずゑかたよるかは竹の よゝになれなばねもたえぬべし（一二九）

・ あはたの右大殿、夜ふかくかへらせたまひて、ひかげを給はせたりしかば、御返きこえさせし

つゝめどもうきに人めのおしければ あけば日影のまばゆからまし（二四〇）

・ かりそめはかりおもひし人の、まめやかにかたらふ人いできぬときゝて、うつろひたる萩のした葉にかきて

うつろふは下葉ばかりと見しほどに やがて秋にも成にけるかな（一四六）

・ むかしのともだちのもとより、おほきなるたちばなをふみのなかに入て

たぐひなきこひする人のあたりに 花たちばなもかばかりやなる（一七四）

・ ある人、このひとをかたらはんと人にもいけ、ふみをもをこせんとおもひけるほどに、すぞろなるきんたちなりと女かたらふ

ときゝて、菊にさして

ちらすとてきくに心をかけたれば 花こそいたくうつろひにけれ（一七九）

・ ともだちのもとなりし、その人にはなれてまたのとし、中のねのひの松をむすびて、けふはなかのねのひとはしらずやとて
たれをけふまつとかいはむかくばかり わする、中のねだけなるよに（一八〇）

・ おなじ日、女郎花をうへよとて人のをこせたれば

ひこほしにしのぶるひとやかよふらん けふしもにほふをみなへしかな（一八四）

128 朝光集（書陵部蔵）

・ とて、やなぎのえたに、あをきしきしにつけて、そのくらひとに

にはひさへちるぞわびしきあをやぎの かたいとしてはなどかときけむ（六）

・ むまの内侍のみなみなるいゑに、十二月廿日はかりにわたる、松どもにつけて
はるちかきとなり君はすみのえの まつひと、はたおぼ、ゆるかな（二二）

・ みあれのぜんじあまになりたるに、しきみのえだのむしついたるにつけて

あめのしたふりてあはれといふほどに 身のさだめたるむしぞかなしき（二八）

・ ひたちのをの、みまきより、くさたてまつれるをみたまひて

ひたちなるをの、みまきのつゆくさの うつしはこまのをくにぞ有ける（五〇）

・ 三条の此方より帰給ひて、萱草花にさしたまて

おこたりのいろにいでたる花みれば もの思ひしれるをりかとぞ思ふ（八二）

・ またの日まうでたれば、はすの花をかねしてつくりて、みのなかにはこはひかたいしほをいれてやりたまふ

ひたくればきえやしぬらんうたがはぬ はなのかほをもけさは見るかな（九五）

・ 正月十五日、ねの日にあたりけり、ほりかはの中宮わたらせたまひて、しろかねの小松のえだに、あをきかみにて、ながきつ

けたまふ、中将にて

きみがよをゆく／＼みればこまつより ほかのみどりはみえずぞありける（二〇〇）

・あめに、十月ばかりに、もみちのみなちりたるにつけて
うしとおもふあきにをくれてとまれる　ひとはかひなきものにぞ有ける（一一四）
129 傳大納言殿母上集（書陵部蔵）道綱母

・とのより、やえのやまぶきを、たてまらせ給へりけるに

たれかこのかずはさだめしわれはたゞ　とへとぞ思ふでのやまぶき（一一）

・かへりことするを、おやはらからせいすとき、て、まろこすげにさして

うちそばめきみひとりみよまろこすげ　まろはひとすげなしといふなり（一二）

・女院はまたくらひにををしましゝをり、八講をこなはせ給ける、さゝげ物にはちすのす、まいらせ給とて

となふなるなみのかずにはあらねども　はちすのうゑのつゆにかゝらん（二九）

・おなしころ、にひ^{（う）}のとの、たち花をまいらせ給ふれば

かばかりもとひやはしつるほと、きす　はなたちばなのえにこそ有けれ（三〇）

130 相如集（内閣文庫蔵）

・人のむめこひたる、やるとて

しらじかしはなゝる人のこゝろには　かゝるなげきの身になれりとも（二六）

・つねにいひたはるゝを、はじめよりの人あれば、わづらはしがりて、いらへもせぬを、とのゐしてつとめてあり、くちおしくて、

みかうしはなちて、手をたゝけば、ふとよりきたり、にげてかへりぬ、みかうしあくる人に、たれぞととへば、あさがほにさ

して

つゆのとくおきてみつればあさがほを　にくげなりともおもひぬるかな（三一）

・いきことなしたまふとある、ねたしとて、かゞみ草にさして

あさがほのよにこそあらじかげうつる　かゞみ草をぞ、こにみつらん（三四）

・賀茂のまつりの日、しりたる車にたちばなやるとて

かをとめてむかしのひとをたづぬれは けふはあふひになりけるかな (五四)
 131 為頼朝臣集 (三手文庫本)

・ 五月のすゑに、さくらのもみぢたるにつけて

わがやどのこずゑにのみは秋こじを いかにもみつるなつのなかばぞ (五六)

132 実方朝臣集 (群書類従) 実方 I

① 石清水のりうしのまつりのつかひにて、ためまさの朝臣のありけるとしの舞人にて、またの日、かざしのはなにさして
 かつら河かさしの花のかげみえし きのふのふぢそけふは恋しき (二)

② ほり川の院にて、御屏風のうしろに、こまの命婦人がゐたるに、かみよりやまぶきのはなを、なげこさせ給へるを、うへのせ
 させ給へるとこゝろへて

やへながら色もかはらぬやまぶきの 九重になどさかずなりにし (一二)

③ うちわたりの女に、尾花につけて

これをみよちぎらぬ野べの尾花だに こと社はねまねくものをば (一〇八)

④ はやう物いひし人に、かれたるあふひにつけて

いにしへのあふひと人はとがむとも 猶そのかみのけふぞわすれぬ (一二四)

⑤ はちすの葉に、(三分五厘)をつゝみて、女に

いづれをかのどけきかたとたのまゝし はちすの露とうつせみの身と (一三一)

⑥ とのもりの君に、むらさきこひたる、をこすとして

かこつべき人もなきよにむさしの、わかむらさきをなに、めづらん (一五二)

⑦ 承香殿の宰相君、なしをさしいでたれば

かくれなき身とはしるく山なしの おふのうらまでおもひなるらん (一五七)

133 実方中将集 (書陵部蔵) 実方 II

① いはし水のりうしのまつり臨時祭のつかひに、ためまの朝臣のありけるとし、まひ人にてかへりてかへりての又の日、かざしのはな
にさして (二)

② ほりかはの院にて、御ひやう風屏のうしろに、こまの命婦小馬のゐたるにかみからやまぶきの花をなげとらせ給へるに、うへのおは
しますところえて (一〇)

⑧ おなじころ、道信の中將花につけて

すみぞめのころもうきよのはなざかりをりわすれてもをりてけるかな (二六)

③ うちわたりの人に、おばなにさして (一一三)

④ はやうものいひし人に、かれたるあふひにさして (一三三)

⑤ はすのはに、せみをつゝみて、女 (一四三)

⑨ ある女の、すぎのみをつゝみて、をこせたりければ

たれぞこのみわのやまもとしらなくに 心のすぎのわれをたづぬる (一五一)

⑥ とのりのかみに、むらさきこひたれば、をこすとして (一六九)

⑩ をんなにものいひて、又日、とこなつにさして、いかゞありけむ

とこなつのはなのかけつゆにはむつれねど ぬるともなくてぬれし袖かな (二二七)

⑪ あるやむごとなき人に、かつらたてまつり給けるに

君がためやをよのかみをかけつゝも なをすぢことにいのらるゝかな (二九二)

134 実方朝臣集 (書陵部蔵) 実方Ⅲ

④ かれたるあふひを、はやうものいひしひとに、みあれの日やるとて (一二)

⑩ 女どものいふとてありけるに、いかゞありけん、またの日、とこなつにつけて (一八)

⑤ なかゝはの宰相の君に、はすの葉にうつせみをつゝみて、やりたりければ (二三)

⑧ にわし内膳院のみかど、うせたまひてのころ、桜の枝を道信の中將にやるとて (七六)

②にわしのみかとをりたまひて、日ごろありて 山ぶきのさきたる を人のたまはせたるを見て (一〇〇)

⑫正月ついたちの日、たちばなのえだに、ゆきのふりかゝりけるを、三位中将のもとにやる

ときははるはなはさ月のはなからも とりのこゑにやけさはわくらん (一三七)

いはし水のりんじのまつりのつかひに、ためまさかまかるとし、まひ人にて、かざしのはなさしてやる

かつらがはかざしのはなのかげみえし きのふのふぢぞけふはこひしき (一四六)

135 実方集 (天理図書館蔵) 実方 IV

136 清少納言集 (書陵部蔵) 清少納言 I

①いくとせもゆめく わすれたまふなといひをきて、よつきといふにかへりて、くれ竹につけておこせたらば

わするなよくといひしはくれ竹の ふしをへだつる数にぞ有ける (一五)

②はるかつらのえだ のもたるにさして

花もみなしげき木ずゑに成にけり などか我身のなるかたもなき (一六)

③おなじ人、みなつきばかりに、はぎのあをき下葉のこはみたるを折て

これを見よ上はつれなき夏はぎの 下葉かくこそ思ひみだるれ (二二)

137 清少納言集 (書陵部蔵) 清少納言 II

①ものへゆくとして、ゆめわすれたまふなといひて、よわかといふに、くれたけにつけて (一三)

④はるかにて、きのかれたるにつけて

花ちりてしげきこずゑの程もなく うらみときにもいかなるべき (一四)

③世中いとさはがしきとし、とをき人のもとに、はぎのあをきしたはの、きばみたるにかきつけて、六月ばかりに (一九)

138 しけゆき (西本願寺蔵「三十六人集」)

・難波にてふなせうようして、きしのふぢのはなを、りてやかたにさして、くれにかへるとて

こくふねにけさよりかけしふぢなみは よるさへみゆるものにざりける (二〇二)

・はる、くら人たひとといふくつを、**花**につけてえさせたる

あしびきの山のさくらもみつゆかし (マ) このたびえたるくつのをしきに (一六四)

139 中務親王集 (伝寂然筆切) 具平親王

・あるいろこのみたつ人のもとに、**まつたけ**をあきかみにつゝみて、すみをきかきつけて
おもひやるふもとの、べのふちばかま やまのしづくに (四)

140 藤原長能集 (書陵部蔵) 長能 I

① 女に、**なつのはな**につけて

ゆきをうすみかきねにつめるからなづな なづさはまくのほしき、みかな (五二)

② 女の服にて、みやにまいりて侍しに、**花**ををりてとおほせことはべりしかば
したつえにさかすしもあらずさくらはな いかでか、けむすみぞめのそで (一一一)

141 長能集 (書陵部蔵) 長能 II

② は、のふくにはべしとし、宮にまいりたるに、**おまへなる花**をおりてと、おほせことある (九六)

142 小大君集 (書陵部蔵) 小大君 I

① 又、五月五日、**さうふのね**をうくひすにつくりて、**むめのえだ**にすゑて給はせたるに

むめがへにとりあやまてほとゝぎす こゑのあやめもたれかわくへき (二八)

② 宮さくのことなり、たうのみねの君に、ある大とこのさりへのかうろにいれんとて、**梅花**さぶらふなるすこし給はらん、と
ましたりければ

春風にちりはてにけりむめのはな た、かばかりぞえだにのこれる (三六)

③ 三の宮の御いかの事はためたふの君なんつかふまつり給ける、**まつのみ**いりたると、そのえだにつけて
ときはに、てのとけきものはあめのした ちよまつえだのかげにざりける (五九)

④ おとこ、**まつ**をむすびて

そめかへしくしをしら^{へて}でいそのかみ おもひまつばをむすびおくかな (六七)

⑤ なでしこを人のがりやるとて、五月五日、くすだまにつけゝる

なでしこのけふひきそふるあやめ草 さはのものとはおもはざらん (一三七)

143 小大君集 (林家旧蔵) 小大君 II

④ まつをむすびて、おとこ (六四)

⑤ なでしこを人のがりやるとて 五月五日クスタマニツケケル (二一七)

144 小大君集 (書陵部蔵「三十六人集」) 小大君 III

⑤ なでしこを人のがりやるとて、くすだまにそへて (二五)

145 小大君集 (書陵部蔵) 小大君 IV

⑥ ちいさきこしりのきなるを、おなじいろのかみにつゝみて、
よそひとにとらせたりければ

くものたつりうの山のをみなへし

くものたつりうの山のをみなへし くちなしいろはくひぞわづらふ (二三)

146 重之の子の僧の集 (針切) 重之子僧

・ あやめにつけて、ひとのもとに、はじめて

けふよりはよどのわたりにおりたちて あやめのくさのねをぞたづぬる (六三)

147 重之女集 (書陵部蔵)

148 冷泉院御集 (書陵部蔵「代々御集」)

149 藤原惟規集 (書陵部蔵)

150 大江嘉言集 (彰考館文庫蔵)

・ ある人のくちなしをこひたる、やるとて

ゆめばかりはかなくみゆるものなれど いろのふかさのためしにぞやる (六六)

・ほうもちにつけんとて、まつのえだこひたる、やるとて

おろかにはおもはざらなむまつといへば　このひとえだもをなじちよなり（一〇六）

・三月三日、となりより、も、の花こひにおこせたる、やるとて

も、の花やどにてたてればあるじとて　すける物とや人のみるらん（一六四）

151 匡衡集（書陵部蔵）

・あぜちの大納言との、御物いみにこもりて侍けるに、さぶらひのものども、さうぐしがりて、人にさけをこひたりけるに、銭
ふたつらぬきをつけてをこせたるに、菊の花につけて、いかにといはましといひ侍りけるに

あやしくもひとと菊に露たまの　ふたつらぬきに成にけるかな（三三）

・うらみて、ひさしう、いかで秋風のいたくふきけるに、とこなつにさして

霜やをく風にやなびく床なつの　よるのうへこそとはまほしけれ（三七）

・三条院の、東宮と申しとき、やまぶきの花をたまはせて、歌よめとおほせられしかば

やまぶきを春のみやこにたづぬれば　こ、のへにこそ花はさきけれ（七二）

・むすこのむまれたりしいゑをさりて後、そのこの藏人になりて、かの家にすむ人をかたらひてかよひ侍しに、其家なる紅梅をお
りて、その家のあるじ、むかしみしむめの、こうばいに成たるみよとて、をこせて侍し

みどり子のうへし梅の花みぬ程に　ことしはあけに色ぞかよへる（八〇）

・うちわたりの人に、やまぶきにさして

九重にへだてしつきのさまかへて　ひとへにたのむやまぶきの花（一〇〇）

152 大式高遠集（書陵部蔵）

・潤三月、花山院の、さくらの花のちりたる枝につけてたまへる

さくら花春くは、れるとし、もぞ　つねよりも猶ちりまさりける（一一）

・むらかみの御時に、四月の御灌仏に、承香殿の女御のおほむせは、まつづくり枝につけて
もてまいれる

なかに、ふぢつほのわらはの、いときよげなりしかば、かくなむいひにやりし

まつならでおもひぞかくるふぢのはな　めでたきいろのをらまほしさに（一二三）

・堀川の中宮に、中納言の君といひて、きよげなるひとさむらひしを、物などいひしほどに、みちたふの少将にすまれて、いくばくもなく、とはれずなりにしをきゝて、をみなへしのかれたる枝につけてやる

をみなへしあきのかぜにしほられて　いまはかれぬときくはまことか（一九）

・さくらの花のをもしろきにつけて、ある女のもとに

へだてたるかすみのまよりちるはなは　しのぶにあまるこゝろを見よ（五三）

・いろこのみし人のもとに、いきたりしかば、ものなどいひて、かへりなむといへば、せめてとゞめしかば、とゞまりてありしほどに、れいきける人の、かどをたゝきてこしかば、ことかたよりいで、ゆくほどに、やのなるをとのせしかば、おそろしくおも

ひて、またの日いとゝく、むめのはなのちりたる枝につけて、いひやりし

おほかたにちるとみしだにおしけく　やかぜにたにもはなのちるらん（八九）

・はらめる女のもとに、しづめをやるとて

きみがこをなつうめとこそおもひしか　あきまでなるぞこゝろもとなき（九五）

・ある所に、わかなやるとて

しめしのにほふるわかなのいつしかと　かたみにけふはとしやつむらん（一一九）

・あるおとこのしりたりける女のもとに、ある女のもとに　まゆみのもみぢにつけて

色ふかきまゆみはことにおほゝえて　こゝろにふるもかひなかりけり（一二九）

・ところを、むめのえだにつけて、人のをこせたりしに

むめのはなよのつねならず見ゆるかな　ところがらにやにほひますらむ（二五四）

・村上の御時の賀茂祭日……くるまにのりうつるとて、なかにきよげなりし人に、あふひをとらすとて
神に我いのりしことやかなふらむ　けふしもきみにあふひとおもへば（三〇一）

・ありし女の、おとこにつきてさとにありしに、十月許、うつろひたる菊につけてやる
みしよりもいとゞかれゆくしらきくの うつりこゝろは花もありけり (三二七)

・むろまちどのより、きくのうつろへるを、おりてたふとて、小武のあまきみに
秋のつゆかたみとをきしはなれど きみますやどにうつろはすかな (三二八)

・あま一品の宮より、かれたるきくに付けて、たまへる
いにしへの、こりすくなき菊のうへに をきそふつゆの身をもしるかな (三二九)

・菊のひらけたるにつけて、前式部大夫のもとにやる

きて見んといひしはいつぞきくのはな ひらけてのちはけふもくらしつ (三三三)

153 むらさき式部集 (実践女子大学蔵) 紫式部 I

① かたゝがへにわたりたる人の、なまおぼくしきことありとてかへりにけるつとめて、あさがほの花をやるとて

おぼつかなそれかあらぬかあけぐれの そらおほれるあさがほの花 (四)

② はるかなるところにゆきやせん、ゆかずやおもひわづらふ人の、やまざとよりもみちをおりてをこせたる
つゆふかくをく山ざとのみぢばに かよへるそでのいろをみせばや (八)

③ おなじ人、あれたるやどのさくらのおもしろきこととて、おりてをこせたるに
ちるはなをなげきし人はこのもの さびしきことやかねてしりけむ (四三)

④ あかうなればいりぬ、長きねをつゝみて

なべて世のうきにながる、あやめぐさ けふまでかゝるねはいかゞみる (七〇)

⑤ あさぎりのおかしきほどに、おまへのはななどもいろくみだれたる中に、をみなへしいとさかりなるをとの御らんじて、ひ
とえだおらせさせたまひて、きちやうのかみより、これたゞにかへすなとてたまはせたり

をみなへしさかりのいろをみるからに つゆのわきける身こそしらるれ (七六)

⑥ ちじうさいしやうの五せちのつばね、みやのおまへいとけちかきに、こうきでんのうきやうか人夜しるきさまにてありしこと

など人々いひたて、日かげをやる、さしまぎらはすべきあふぎなどそへて

おほかりしとよのみや人さしわきて　しるき日かげをあはれとぞみし（九九）

⑦ こう梅をおりて、さとよりまいらすとて

むまれ木マメのしたにやつるゝむめの花　かをだにちらせくものうへまで（一〇二）

⑧ さくらののはなのまつりの日までちりのこりたるゝ、つかひのせうしやうのかざしにたまふとて、葉にかく
神世にはありもやしけん山さくら　けふのかざしにおれるためしは（一〇四）

154 紫式部集（陽明文庫蔵）紫式部Ⅱ

① 方たがへにわたりたる人の、なまおほくしき事ありて帰にけるつとめて、あさがほの花をやるとて（四）

③ おなじ人、あれたるやどのさくらのおもしろきことゝて、おりてをこせたるに（四三）

⑨ 八重やまぶきをおりて、ある所にたてまつれたるに、ひとへの花のちりのこれるをゝこせ給へり

おりからをひとへにめづる花の色は　うすきをみつゝうすきともみず（五二）

⑩ 世の中さはがしき比、あさがほをおなじ所にたてまつるとて

きえぬまの身をもしるゝあさがほの　露とあらそふ世をなげく哉（五三）

⑤ あさぎりのをかしき程に、おまへの花ども色々にみだれたる中に、をみなへしいとさかりにみゆゝ、おりしも殿いで、御覧ず、

一枝おこせたまひて、几帳のかみより、これたゞにかへすな、とてたまはせたり（六九）

⑦ 紅梅を折て、さとよりまいらすとて（九七）

⑧ うつきの祭の日までちりのこりたるつかひの少将のかざしにたまはすとて、葉にかく（九九）＊葵

④ 五月五日もろともにながめあかして、あかうなればいりぬ、いとながきねをつゝみてさしいてたまへり、小少将君（一一八）

⑪ 源氏物がたりおまへにあるを、殿御覧して、れいのすゝることどもいできたるついでに、梅のしたにしかれたるかみにかゝせ
給へる

すき物となにしたてればみる人の　おらですぐるはあらじとぞおもふ（一二七）

155 道命阿闍利集（書陵部蔵）

・法輪にありしころ、花をおりて人に

おぼろけかあらしの山にさく花を　ひと枝にても見するこゝろを（二〇）

・ほうりむに侍けるころ、もみちのしたりしを、人の御もとにたてまつりし

人もみぬをぐらの山の紅葉、や　なだかゝるよのにしきなるらん（一六）

・山吹の花たはせ給へる人によそへて、人くよみしに

むかしみしるでの山吹けふはあれど　すぎにし春はなをぞこひしき（三三）

・山寺にいきたりしに、やへさくらのみえしを、人にやりたりし

白露の八重たつ山のさくら花　いづれを花とわきておりけん（六二）

・侍るところにおひたるしのぶくさを、ふみにさすとして、人のとるをみて

いづかたにゆかむとすらんしのぶくさ　ふりにしやどのつまをわするな（七九）

・人のもとに、女郎花やるとて

きみゆへにてをふるゝかなをみなへし　こゝろをくらす野辺の白露（一三六）

・ある法師のもとより、やまぶきを、これみ給へとて、かくいひたる

やまぶきのゐでにほどこそへぬべけれ　さきかさねたり花のちるまで（一九九）

・ゆきふる日、むめの花をおりて、人のもとに

ふる雪にいまはまがへしむめのはな　おりけむ袖に、ほひまさりて（二三六）

・ところの木の、えだのやうにて、一尺ばかりなるを、人のもとに

をとにきくこまもろこしはひろくとも　かゝるところはあらじとぞおもふ（二四二）

・こぶしの花を、人のもとにやるとて

わがやどのこぶしのはなをうちとけて　かざしにさすなかまちあやうし（二四二）

・ 中將家 さくらいとおもしろくさきたりしを見て、めのもとにやりし
うゑをきし人もなけれど春くれば はなはむかしにかはらざりけり（五四）

・ 大学助、とのゐ所より、をみなへしにつけて

こゝにかくめづらしと見るをみなへし おほかるのべをおもひこそやれ（一〇八）

・ つれづなりしに、いみじうさきたる花、人のもとにやるとて

のこりなくけふぞにほへるさくらはな かぜまつほどをひとり見るかな（一一三）

・ 雲林院の さくら一枝、あるあかりつかはすとて

またみせん人しなければさくら花 いまひとえだをおらずなりぬる（一五二）

・ 五月五日 さうぶにさして、返事せぬ人につかはす

としふかきねはかくれぬるあやめ草 あやめもしらでやまんものは（二五九）